続・続　私的アンソロジー

しあわせの構図

Ⅱ　歌集

黒沼　貞志

続・続 私的アンソロジー「しあわせの構図」

Ⅱ 歌集

黒沼 貞志

もくじ

一　やましん歌壇掲載歌
二　短歌結社「黄雞」歌誌掲載歌
三　山形県歌人クラブ年刊歌集掲載歌

やましん歌壇掲載歌　一

（＊）：写真短歌作品の詠草を単独で投稿して掲載されたもの

（＊＊）：他者の写真に拙詠草を添えた共同制作写真短歌作品の詠草を単独で投稿して掲載されたもの

令和五年二月二十七日

月山道行くも止まるも地獄なり闇夜に加わるホワイトアウト　（＊＊）

冬枯れの枝に戯るる山雀に見惚れて憶ふわが幼少期　（＊＊）

令和五年一月三十日

散りてなほ枝に架かりし枯葉らの揺れてあらがふ小春の風に　（＊）

令和四年十二月二十六日

ヴェネツィアの恋人たちの息づかひ不意に湧き出づ古きアルバム　（＊）

コロナ禍のおくやみ欄に「家族葬」たちまち広がり薄らぐ絆

鳥海の賽の河原に入り日射し尾花の風に揺れて煌めく　（＊＊）

令和四年十月三十一日

落陽と友らとワインと潮騒に自粛の澱の消えゆく晩夏　（＊＊）

小鳥らとジューンベリーの収穫を競うも譲る「共生」のため　（＊）

令和四年九月十九日

脱サラしはや十五年の友の茄子いまや手練れの栽培モデル　（＊＊）

令和四年八月二十二日

ひたひたと足音聞こゆ改憲の数の揃うを報じるメディア

コロナ禍を娘と語る三日間われら夫婦の未来予想図

朽ちてなお青空割(さ)きて凛と立つ白骨木(はっこつぼく)は樹林の中に（筆頭三席）（＊）

選評　「白骨木」とは樹皮が剥がれて真っ白になった巨大な枯れ木。枯れてもなお威厳と風格を生きた樹林の中で誇示している。上の句に勢いがある。

令和四年六月二十七日

山里の早苗の田の面に映りおる雪斑なる飯豊の山並み（＊＊）

連れ合いと歩みこし日々半世紀はからいささやかコロナ禍の宴（＊）

春さなか芽吹く雑木々従えて勇者のごと立つ辛夷の白し（＊）

令和四年五月十六日

他人ごとと言えぬ歴史ありわが国の百年前の言論統制

咲き匂う桜の前の老いふたり背に漂えり偕老（かいろう）の日々　（＊）

令和四年三月二十一日

七五三の絵馬の写真を成人の祝いに添える社務所の計らい　（＊＊）

窓開くれば大寒の朝の西空に輝く白き立待の月

令和四年二月二十一日

首失せて寄り添い並ぶ道祖神古道の辺の朽ち葉の海に　（＊＊）

令和四年一月二十四日

風が凪ぎさざ波消ゆる杜の池逆さ紅葉の綾錦なる　（＊）

選者情報（掲載順・敬称略）

令和五年二月二十七日　佐藤幹夫・井上菅子　令和五年一月三十日　佐藤幹夫

令和四年十二月二十六日　佐藤幹夫・井上菅子・大滝　保　令和四年十月三十一日　井上菅子・大滝　保　令和四年九月十九日　佐藤幹夫　令和四年八月二十二日　佐藤幹夫・井上菅子・大滝　保

令和四年六月二十七日　佐藤幹夫・井上菅子・大滝　保　令和四年五月十六日　佐藤幹夫・大滝　保

令和四年三月二十一日　井上菅子・大滝　保　令和四年二月二十一日　佐藤幹夫

令和四年一月二十四日　井上菅子

令和三年十二月二十日

冬立ちて霜の朝の蜘蛛の巣は星をかたどり過客を癒す　（＊＊）

令和三年十一月八日

一条の縄で括られしんと立つ夕光（ゆうかげ）の射す墓じまいの石

令和三年十月十八日

ゆく夏を惜しむがごとく鳴き頻る蝉と迎うる敗戦忌の昼

令和三年九月二十日

一匹の車窓の飛蝗に甦りふと口遊さむ「いまはもう秋」　（＊＊）

令和三年八月二十三日

熊避けの鈴の音近づき遠ざかるいつもの山路いつもの挨拶

咲き揃う我が家の貌の夏椿しのつく雨に濡れそぼち立つ　（＊）

令和三年六月十五日

ふる里の伝承絶えし獅子頭設ふ古祠に父の面影　（＊＊）

うぐいすの初鳴き届きおずおずと目覚むる朝はコロナ禍の春

廃屋の狭庭の草花風に揺れ主の去りしを知るやしらずや　（＊）

令和三年四月十九日

名を刻す指輪で特定されし友散りし砂漠禍祈る十回忌

健診日謝りてなおわが腕に三度の針射す新人看護師

亡き母の形見の日記に挿まれし彼岸の兄の記事懐かしき　（＊）

令和三年二月二十二日

雪纏（まと）い墨絵の如き裸木に重ねて憶（おも）えり新緑紅葉　（＊）

令和三年一月二十五日

寄贈せし己が冊子の納まりし書架の一隅舞台のごとし　（＊）

選者情報（掲載順・敬称略）

令和三年十二月二十日　佐藤幹夫　令和三年十一月八日　大滝　保　令和三年十月十八日　井上菅子

令和三年九月二十日　大滝　保　令和三年八月二十三日　佐藤幹夫・井上菅子

令和三年六月十五日　佐藤幹夫・井上菅子・大滝　保　令和三年四月十九日　佐藤幹夫・井上菅子・

大滝　保　令和三年二月二十二日　大滝　保　令和三年一月二十五日　井上菅子

令和二年十二月二十一日

粟島に重なり見ゆる影月山出で合う幸をひとり噛みしむ　（＊＊）

サックスの音に誘われ公園を辿れば若者壁に向きおり　（＊）

令和二年十一月二十三日

風情より取り外しの手間難渋に夏簾揺れはや秋の風

令和二年十月二十六日

「おとうさん」幼い文字の絵日記が不意に現るキャビネットの奥

かなかなが呼び水となり虫時雨黄昏賑わい小夜へと向かう

令和二年九月二十八日

朝摘みのバジリコの葉を広げ干す狭き厨にアジアの香満つ

郭公に野鳩加わりデュオとなる遠雷幽か半夏生の朝

令和二年八月三十一日

戦時下の「欲しがりません」浮かびくる新生活のメディアの喧伝

令和二年八月三日

山の路日の射す片方にハルジオン蝶と戯れ我を誘う　（＊）

白マスク一枚加わる衣更え初夏の風切り列なす自転車

風そよぎ甘き香流るる山路にニセアカシアの大樹揺れおり　（＊）

令和二年五月二十五日

蕗味噌は春の使いと立つ厨レシピ片手に男の一品

コロナ禍にインバウンドの災いし拡散止まらぬ日本列島

令和二年四月二十七日

なごり雪「これがそうか」と呟けり妻も頷く春の往還　（＊）

令和二年三月三十日

脚本の台詞の間合いに仕組まれて際立つ沈黙饒舌凌ぐ

凍てし道粉雪の下に隠れおり歩みは摺り足ゴミを出す朝

令和二年三月二日

薄墨の便りが届きまた一つ住所録から友の名を消す

令和二年二月三日

ひたすらに我癒されし「白い森」おぐにの秋の懐深し　（＊）

黄昏るる湖面に溶け込む秋の山墨絵にも似てこころ凪ぐ時　（＊）

選者情報（掲載順・敬称略）

令和二年十二月二十一日　佐藤幹夫・大滝　保　令和二年十一月二十三日　井上菅子

令和二年十月二十六日　佐藤幹夫・大滝　保　令和二年九月二十八日　佐藤幹夫・井上菅子

令和二年八月三十一日　佐藤幹夫　令和二年八月三日　佐藤幹夫・井上菅子・大滝　保

令和二年五月二十五日　井上・大滝　保　令和二年四月二十七日　佐藤幹夫

令和二年三月三十日　井上菅子・大滝　保　令和二年三月二日　佐藤幹夫選

令和二年二月三日　佐藤幹夫・井上菅子

令和元年十二月十六日

山もみじ夕影受けて色まさり映る湖面は合わせ鏡に　（＊）

ハイカーの標（しるべ）ならんと咲き並び山路を誘うりんどうの群れ　（＊）

令和元年十一月十八日

寺の秋茶会の前の挨拶は仏縁地縁の訛り溢れて　（＊）

風に乗り笛の音届く散歩道辿れば吹き手東屋に居り　（＊）

令和元年十月二十一日

足元に蚊遣り焚きつつ登り窯の火入れ待ち居る窯主ひとり　（＊＊）

風鈴に虫の音加わりコンチェルト主役の代わりはや秋の風

令和元年九月二十三日

十五歳父の遺骨を抱き帰る双葉町の墓に夏の日落ちき

令和元年八月二十六日

「寄り添う」の言葉の重さ比べ読む沖縄語る今朝の新聞

山あいのオープンガーデン風そよぐ鮮(あざ)やぐ初夏を妻と頒(わか)てり　（＊）

令和元年七月二十九日

郭公の声のリレーに誘われ歩む山道こみどり萌黄

銀竜草朽葉押し分け株立てり過客を癒す山の辺の道　（＊）

令和元年六月十一日

石蹴りの筋跡避けて草むしる桜の蕾ほころぶ公園（筆頭三席）

選評　自身の、幼いころの思い出が脳裏を過って生まれた心配りであろう。

ごはん時に遊びを止めて帰った記憶。明日の続きの為に「避けて」が効いた。

山里の田舎芝居の幕の下り夜の帳（とばり）に桜舞い散る　（＊）

令和元年五月

改元が紙面に躍り朝の雪解けて路面は煌めく鏡

平成三十一年四月

めぐり来る建国記念日新聞に是非論載りしも遥かとなりぬ（筆頭一席）

選評　皇国史観で教育を受け、戦後全てを否定されて戸惑った。四大節の一つ「紀元節」を「建国記念日」と変えることに世論沸騰した頃への感慨を詠んだ。

核を持つ国が他国へ求めたる放棄の論理に不条理覚ゆ

平成三十一年三月

手織り機に横糸通す杼（ひ）の如く人を繋ぎてまちづくりなる

平成三十一年二月

新聞を配りし人の自転車の轍（わだち）一筋初雪の朝

平成三十一年一月

参道の日の斑を踏みて黄落に誘われゆく黄昏の道

求人誌派遣やパートが幅利かせ先の読めない社会となりぬ

選者情報（掲載順・敬称略）

令和元年十二月十六日　佐藤幹夫・大滝　保　令和元年十一月十八日　佐藤幹夫・井上菅子

令和元年十月二十一日　佐藤幹夫・大滝　保　令和元年九月二十三日　井上菅子

令和元年八月二十六日　佐藤幹夫・大滝　保　令和元年七月二十九日　阿部京子・井上菅子

令和元年六月十一日　阿部京子・大滝　保　令和元年五月　井上菅子

平成三十一年四月　阿部京子・大滝　保　平成三十一年三月　井上菅子　平成三十一年二月　大滝　保

平成三十一年一月　阿部京子・井上菅子

平成三十年十二月

山頂の標識に残る忘れ物サングラスに映る秋の白雲　（＊）

千余段杖を頼りに登り来し人に応うる夕山紅葉　（＊）

平成三十年十一月

谷向こうに西日を受けて照るもみじ見つつ語らう老いの背ふたつ　（＊）

平成三十年十月

疾歩するハイカー独り馬の背の遥か彼方にはや秋の雲　（＊）

戦いの痕跡残る土塁脇鳥居の陰の群れ曼珠沙華　（＊）

高原の広場の隅に読書する人の傍らをアスリートら過ぐ　（＊）

平成三十年八月

姫沙羅の花弁に残るひと雫真夏の空の青映しおり

日捲りの暦のごとく政策の消えては現れ言葉が躍る

高原の藪を掻き分け進む先叢（む）れ咲く菖蒲（あやめ）に擦り傷忘る　（＊）

平成三十年六月

春の暮の花散り果てし山里の黄昏時は緑のとばり　（＊）

お達磨の匂いやかなる江戸彼岸いにしえ人の心を映し　（＊）

地方にもインバウンドの波至り行楽の地に多国語溢る　（＊）

平成三十年五月

道の辺の祠の裏は春さなか日影うらうらカタクリ群れて　（＊）

平成三十年四月

参道の連なる日の斑に落ち椿御堂へ誘ふ標（しるべ）となりぬ

御堂へと続く参道雪積みて鳥居を前に佇み祈る　（＊）

一輪の流れ着きたる雪椿堪えぬきし冬を緋に秘めており　（＊）

平成三十年二月

霧の朝佇む岸辺凍みこごり鳥の一声静けさを裂く

中東で散りし友らの七回忌雪の凍む朝この地で祈る

恒例の暮れの作業の近づけり竹馬の友の名リストより消せず

平成三十年一月

一病とつき合いてはや半世紀遊行の門への錫杖とせむ

選者情報（掲載順・敬称略）

平成三十年十二月　阿部京子・大滝　保　平成三十年十一月　阿部京子

平成三十年十月　阿部京子・井上菅子・大滝　保　平成三十年八月　阿部京子・井上菅子・大滝　保

平成三十年六月　阿部京子・井上菅子・大滝　保　平成三十年五月　阿部京子

平成三十年四月　阿部京子・井上菅子・大滝　保　平成三十年二月　阿部京子・井上菅子・大滝　保

平成三十年一月　阿部京子

平成二十九年十二月

散りもみじ甦らせて水の面は新たな舞台漣もなし　（＊）

街中の空家の庭先山とあるくらしの品の朽ちゆくが見ゆ

平成二十九年十一月

猫じゃらし路肩に揺るる田舎道踏む松落葉足に優しき

幸せのきざしか突如の二重虹雨の上がりし刈田に架かる　（＊）

平成二十九年十月

荒沼に墨絵の時間流れきて湖の面は鏡の舞台　（＊）

リリリリリ白露の宵の暗がりの音色に応ふる仲間のリリリ

平成二十九年九月

帰国せしパリの友との語らいの話題いまだに原発震災

草花を巡りて出で逢ふ酔芙蓉口遊みけり「風の盆恋歌」　（＊）

久々に友と語らふショットバーカクテルグラスに汗の伝ふる

平成二十九年七月

断捨離の成果の箱を古書店へこころ残りの帰路はたそがれ（筆頭一席）

選評　断捨離とばかりに箱一杯の古本を出したが、後悔の念も消えない。

結句の「たそがれ」は「人生の黄昏（たそが）れ」の心象でもあろう。気持ちの分かる歌。

松蝉に蓮華つつじが色を添へ谷地沼にはや夏のよそほひ　（＊）

平成二十九年五月

大根のおろしのごとき雪積る卒業式の朝の通路に

待ち切れぬ心たずさえ春探しぬかるみ避け行く城址の小路

平成二十九年四月

春の日の射し込む御堂に祈りおり耳を澄ませば雪解の瀬音

目覚めれば鳥の囀（さえず）り耳に入る障子明るく春をうつせり

平成二十九年三月

いつからか知己の名探す「おくやみ欄」

思い湧きいづわが名の載る日（筆頭二席）

選評　歌に詠んだことはないが同じ思いをしたことがある。という人は多いはず。知己の名探すから、わが名の載る日までの軽やかな調べに、重い内容が救われる。

行き暮れて辿りつきたり道の辺のコンビニにはや夕光（ゆうかげ）は射す

平成二十九年二月

新学期子らの弁当始まりぬ朝の隣家にたまご溶く音

平成二十九年一月

生活の脚の手立てを置き去りに免許返上ひとり歩きす

寒風を割きて上れる噴水は幕と広がり山裾隠す　（＊）

選者情報（掲載順・敬称略）

平成二十九年十二月　阿部京子・井上菅子　平成二十九年十一月　阿部京子・大滝　保

平成二十九年十月　阿部京子・井上菅子　平成二十九年九月　阿部京子・井上菅子・大滝　保

平成二十九年七月　大滝　保・井上菅子　平成二十九年五月　阿部京子・井上菅子

平成二十九年四月　阿部京子・大滝　保　平成二十九年三月　井上菅子・阿部京子

平成二十九年二月　大滝　保　平成二十九年一月　阿部京子・井上菅子

平成二十八年十二月

小走りに園児らがゆく黄葉路あいさつ響く霜月のあさ　（＊）

平成二十八年十一月

薄暗き朝の目覚めに鳩鳴けりクウクウククク秋はきており

涼求め車で走るすすき道フロントかすめあきつ群れ飛ぶ

平成二十八年十月

新涼は行きつ戻りつ庭先の虫の世界へ秋の往還

平成二十八年九月

早苗饗のテレビ映像眼に留り忽と戻りぬ少年の頃に

あさまだき目覚めの一杯の白湯（さゆ）旨し備忘録記（しる）す手も捗りぬ

平成二十八年七月

管理下と言われて久しきフクシマの海は黙してメディアが語る

雪残る霊峰を背に芝ざくら覆える堤は王朝絵巻　（＊）

平成二十八年六月

公園に軋んで揺れるブランコに遊んだ子らの気配が残る　（＊）

平成二十八年五月

今の世に広まる「絆」気に留まり「枷」の意味もつ「ほだし」の読みしる　（＊）

いつよりか「世話にはならぬ」が揺らぎをり遠くに暮らす娘と語れば

平成二十八年四月

淡雪がうすく積もれる朝の道足跡ひと筋わが先にあり

雪の道手を取り歩む老いふたり交はす笑みにもにじむ年輪

平成二十八年三月

雪原を一輛列車進み行く女子高生のにぎわい乗せて（筆頭一席）　（＊＊）

選評　過疎地をつなぐローカル線の通勤通学時にのみ賑わう一輛の情景。
簡潔にまとめられた。評も簡潔に終わる。

屋根を打つ微かなる音に心解く雨水間近い目覚めの朝に

たまさかの妻の不在に慣れぬ家事先行き危ぶむ思い湧きいず

平成二十八年二月

起業よりはや十五年廃業の意思を固めぬ勤労感謝日

選者情報（掲載順・継承略）

平成二十八年十二月　阿部京子　平成二十八年十一月　井上菅子・大滝　保

平成二十八年十月　阿部京子　平成二十八年九月　井上菅子・大滝　保

平成二十八年七月　井上菅子・大滝　保　平成二十八年六月　阿部京子

平成二十八年五月　井上菅子・大滝　保　平成二十八年四月　阿部京子・井上菅子

平成二十八年三月　阿部京子・井上菅子・大滝　保　平成二十八年二月　大滝　保

平成二十七年十一月

遠き山近き紅葉を水面に浮かべて池は秋の万華鏡（筆頭三席）　（＊）

選評　遠景、近景すべてを映す水面の華やかさを「万華鏡」と捉えた。

心の動きに雑念がなく直線的な描写が心地よい。

いつからかシルバーウィークと呼ばれおり老いを敬う想い遠のく

平成二十七年九月

かなかなの途切るる声にかなかなと遠くで応えるかなかなの声

フェンス越しのプールで挙がる歓声に幼き日々の想い出湧き来

平成二十七年七月

祭りへと歩みを揃う親子連れすがしき初夏の山間の道　（＊）

平成二十七年六月

戦争を知らない世代が世の中を動かす社会いつか来た道

平成二十七年五月

懐かしきむかしのテンポよみがえり委ねて歩む都心の雑踏

平成二十七年四月

ウェブサイト食のレシピが溢れおり貧しき時代遥かとなりて

平成二十七年三月

十年の歩みを話す機会得て浮かび上がりぬマイライフワーク

雪いろの町を歩めば甦る遥か昔の通学の路

平成二十七年一月

枯れ野原春の彩まぼろしに黄昏早く秋が身に染む

高齢と言えども今はタブレット連れ合い待たせて画像に残す　（＊）

選者情報（掲載順・敬称略）

平成二十七年十一月　阿部京子・井上菅子　平成二十七年九月　井上菅子・大滝　保

平成二十七年七月　井上菅子　平成二十七年六月　阿部京子　平成二十七年五月　井上菅子

平成二十七年四月　阿部京子　平成二十七年三月　井上菅子・阿部京子

平成二十七年三月　井上菅子・高橋光義　平成二十七年一月　井上菅子・高橋光義

平成二十六年十一月

新幹線車窓の先の錦秋に思わず止まる弁当の箸

平成二十六年七月

会合を終えたる昼を軒先の燕話題に再び賑わう

木漏日がいざなう小道その先の休みどころにひとの気配なし　（＊）

主去りし家の庭先草繁し人の気配の露もとどめず

平成二十六年六月

春蘭にまた逢えたねと声かけぬ春まだ浅き山路の片方（かたえ）　（＊）

春寒し蝶もしばしの羽根休み山の小径の陽だまりの中　（＊）

平成二十六年五月

春の彼岸に残雪踏みて墓掃除想い往き交う彼岸と此岸

地鎮祭願い通じて雪の止み友の住居に祝詞流るる

平成二十六年四月

誰そ彼が黄昏となる万葉の世界にひたりひとを想えり　（＊＊）

精検を待つ間の長さ息苦し交わす目線に共感覚ゆ

平成二十六年三月

風邪に臥し久々に見る夢の中母の十八番の懐かしき粥

冬の列車は吹雪く山あい割きて行く向う先にはフクシマの街　（＊）

選者情報（掲載順・敬称略）

平成二十六年十一月　井上菅子　平成二十六年七月　井上菅子・高橋光義・阿部京子

平成二十六年六月　阿部京子・高橋光義　平成二十六年五月　井上菅子・高橋光義

平成二十六年四月　阿部京子・高橋光義　平成二十六年三月　阿部京子・井上菅子

二

短歌結社「黄雞」歌誌掲載歌

（平成三十年夏号以降の投稿歌）

令和四年冬号投稿歌

歌題　アンソロジー　２０１６～２０２０　そのＩ

山里の早苗に水と光満ち春色の濃き山映りけり

水仙と共に仲良く廃バスは新たな役目で旅人癒せ

春蘭と猩々袴と野菫が咲き零れける卯月の山路

「雨音はショパンの調べ」口遊み雨垂れの写真飾る走り梅雨

草花が初夏を迎えて人を待つ英国風のガーデン爽やか

花満ちる薔薇園分け入るカメラ女子マナーを忘れ擦り傷忘れ

初秋の休日楽しむ家族連れ薔薇の見守るしあわせの構図

仮装する慣わし今はコスプレにＤＪポリスと渋谷のハロウィーン

秋の山期待のお釜晴れぬガス願い通じて挙がる歓声

遠ざかるちり紙交換耳にしてエコ喧伝の功罪想う

テレビには矜持なき言葉流れ出づ嫌悪先立ちチャンネル変えたり

投稿歌の掲載の日の新聞は読みたくもあり捲りたくもなし

かの国の国民投票魔物おり想い及びぬこの国の先行き

眼閉じ採血に臨むわれのそば看護師患者の会話飛び交ふ

脳ドックのＭＲＩの二十分寄る辺なき闇に響く検査音

十首選

今までは目にも止まらぬ野の草の春先づ咲（ま）

きてハルジオンと知る　　三浦　弥生

商品のごとくわが腕のバーコードデータ読

み込む美人看護師　　三笠喜美夫

「孫の手」を背より取り出す幼な児の手さ

ながらに孫の手入るる　　宮澤　勝男

葉桜のみどり映して城濠の水面はみどり吹く風みどり　　村越　勝子

夏衣かろきを肩にかけるときふはり漂ふ「誰が袖」の香　　山口　園枝

緑濃き葉群れの中に咲く沙羅の朝光受けて白きが極まる　　渡辺恵美子

つい生前の京子先生にやましん歌壇で選んでいただいた己が詠草と類似する対象「沙羅」の詠草に目が止まる。緑、朝光、白きなどの色彩が効果的。

父と母逝きにし五月春光（はるかげ）のかぎろひの向かう憶ひ出ゆらゆら　　秋保　嘉子

裸足のまま「けんけんぱ」と遊びし日土の
匂ひの今も懐かし　　伊藤　良子

電球の傘を黒布で覆ひたる戦禍の中の微か
な記憶　　猪俣　きぬ

星空に明るく全けきスーパームーン戦地も
あまねく照らしておらん　　今井喜代

令和四年秋号投稿歌

歌題　アンソロジー　２０１０～２０１５　そのⅥ

寒戻り地蔵の肩に雪の積むこの世の辛苦担うが如し

柔らかき光を浴びて芽吹く杉蘖（ひこばえ）に見ゆる命の営み

アリウムが空にすっくと咲き居りぬわれ誘われ背を伸ばしおり

初夏の山ハートを象る残雪に見惚れて語らう妻とのひと時

尾根の道不意に現わる崖もみじ雲の切れ間のカーテンコール

龍の山歩みに連れ添う鳥の声一息つくたび歴史の舞台

足が冷え目覚める朝に鳩鳴けり暦見やれば寒露示せり

且坐の席帰路で見つけし彩雲に集いし仲間の家路を想えり

ブナ林木漏れ日の中佇めば心の憂さを秋風撫で行く

雪の無き路肩に荒草雨匂うテレビは連日被災地告げおり

携帯の避難情報鳴り響く秋の夜長に心ざわつく

隣席で黄ばむ「太宰」を読む人のこころを探り揺れるわが視線

いつの間に古希の足音近づきぬ今朝も日課の龍頭を巻きたり

人により嘘も方便意味変わる子供も親も教師も窮す

ハレの日に笑みを探して髭をそり鏡の中に老いを見る朝

令和四年夏号投稿歌

歌題　アンソロジー　２０１０～２０１５　そのＶ

語り合う視線の先のさくら花魅入るふたりの夢の隣に

静寂の弓道場に花の舞う一射待つ間にカメラは連射

吾子を抱き城址の桜を背に見やる視線の先の夢に夢見て

境内の春の陽溜まり心地よく時を惜しまず独り身を置く

若葉萌え古刹のもみじいきいきと光蓄え秋に備へん

ジューンベリー白き花々咲き満ちぬ想い浮かびし朝食のジャム

むせ返る若葉の薫る山恋しこころ急かされ暦めくれり

一筋のヒコーキ雲に誘われ強める歩み目指す頂き

秋天の木漏れ日の中歩み行く朽葉積もるる山路やさしき

錦繡が眼下に広がる尾根に立つ忘るる瞬き消ゆる足痛

雪渓の冷気を纏い吹き上ぐる風に癒され山路下れり

冬ざるる連なる朽ち葉に誘われ佇む社に迫る黄昏

フィットネス終えてつかりし温泉の閉じる眼に夕陽煌めく

切り抜いて重ね置きたる新聞は色褪せてなおコラムの出番なし

道半ば甥の客死の報ありぬ心裂かるる妻子の行く末

一首鑑賞

戸の口に足踏み入れれば焼きたての

パンの香りが家中に満つ　浅井眞紀子

一首観賞に於ける立ち位置を考えてみた。

一つは自身の経験や詠草の視点、もう一つは

未経験・未詠草の世界。後者が力量向上には

良いとは思いつつ、パン好きの共感力には勝

てずつい前者に目が止まる。映像も目に浮かぶよう。詠者の続く一首「庭先に・・・」からご自宅で焼かれていると推察できた。拙類似詠で弊共感の一端を（朝摘みのバジリコの葉を広げ干す狭き厨にアジアの香満つ：やましん歌壇佐藤幹夫先生選）。　　黒沼　貞志

令和四年春号投稿歌

歌題　アンソロジー　２０１０～２０１５　そのⅣ

残雪の片方に顔出す若芽あり春の息吹を醸す山路

不自由な足を伸ばして花を撮る注ぐ想いは早春スケッチ

昼休み城址の広場のチアガール弾む身体と黄色い声と

庭先の虫の世界に交代期重唱にぎわう処暑の日の暮れ

ハンモック木立に掛かり風に揺れ人の午睡の気配を残す
ジャグジーの泡に身体を委ねつつ己が来しかた憶ふしあわせ
白き花一輪咲きおる廃屋の荒れし庭先秋風わたる
朝光に古刹のもみじ透かし見ゆ三百余年の時空憶へり
あかあかと川面に映えるもみじ照りこれもひとつの燃ゆる秋かな
天高し錦織りなす霊峰の風に洗われこころ解け行く
冬浅し先人詠みし雪迎え懲りずに今年も探すわが狭庭
大会の主の活躍じっと待つ控えし道具ら無言の語り部
たまさかの出会いでいずる新しき人のつながり織物に似て
一列に車内の座席に座り居りスマホに耽る老いも若きも
職求め人を求めて耐えて待つハローワークは世情を映す

令和三年冬号投稿歌

歌題　アンソロジー　２０１０～２０１５　そのⅢ

雪多き今年の冬を耐え抜きし狭庭に芽吹く小さき花々

大山の桜の片方に石鳥居年月重ね色で競へり

薫風に桜花舞い散る里山は春行くままに緑深まる

窓の外流るる新緑きらめいて列車の旅に期待膨らむ

昼休み丘の木陰に涼んでもスマホ離せぬ今の世の中

庭先に蝉と空蝉並びおり力尽きたるうつし身柔し

週一のフィットネス終え浸かるスパ簾を揺らす新涼の風

露天の湯すだれの先の石鳥居老舗の宿のもてなしの象（かたち）

借景に色付く木々を配置して思い出づくりの蔵王は黄昏

取材受け紙面に載りし我が意見話題のＴＰＰも身近となりぬ

時を経て様変わりたる自己表現渋谷にハロウィン国会にシールズ

昇陽の射し込む寺の石仏と共に佇む山茶花とわれ

忘れ雪これがそうねと語らいて重い腰上ぐ雪掻きの朝

雨音に目覚めし朝は寒九の日母に添寝の昔蘇えり

突然に戻りし寒の雪背負い地蔵の肩も少し重たげ

一首鑑賞

病む地球映すが如くひむがしの

空にあやしく赤き月出づ　菅原　育子

指定された範囲の十名の詠草の中から特に私の感性に響いた（かつて私も類似の「情景」を詠んだことがあります）この一首を選びました。赤い月はストロベリームーン（六

月の満月を指す俗称）のことだろうと勝手に想定しました。かつての私の詠草は単純な自然詠でしたが作者はその月の赤さから妖しさへ、そして病む地球にまで発想を広げて社会詠とした着想・発想に特異性があると思ったのが選定した理由です。　黒沼　貞志

令和三年秋号投稿歌

歌題　アンソロジー　２０１０～２０１５　そのⅡ

雲が湧き山も滴り街中は涼風とおり花の香満ちる

食卓の自前のトマト晴れ晴れと今年の出来映え旨さ増しおり

この暑さ気付いてみれば過ぎし処暑暦と自然身体折り合う

親子孫揃い楽しむ夏の高原鐘（やま）を響かせ祈るひと時

玄関に花野で見つけし尾花活け祭の写真を添えて秋づくり

紅葉狩り思わぬ寒さに悴む手堪えし家族に微笑むお釜

布団干し客を迎える山の小屋歩みし秋の空を風行く

名刹の銀杏の落葉黄の絨毯テレビ告げおり「蔵王は初雪」

残雪が路肩で黒ずむ雨水の日テレビは北の被災地告げおり

満開の桜と競うひこばえの一途さ健気さ愛しさと見ゆ

黙々と地面を均す人ありきゲートボールの戦いまじか

朝まだき日課となりて窓開くる明けの空にはストロベリームーン

木道の延びる先には草もみじ夕映えの中秋老けゆかん

山里の祭りの旗と見紛えりわが家の狭庭の群れジギタリス

二人して身体の不調を語らうに秋の夜長は手に余りたり

令和三年夏号投稿歌

歌題　アンソロジー　２０１０～２０１５

雪掻きで痛めし腰を庇いつつ通う院内社会の縮図

ブナ林見つけし倒木苔むせり馳せる想いを拒みし歳月

玄関へ所移して競い合う紅き水引白き貴船菊

雪冠ぶる月山葉山に見守られ若人競う食の祭典

親子連れ花に囲まれ高原の初夏の一日思い出づくり

木道の片方に際立つ蒼と白連れ合いのごと寄り添うりんどう

ゲレンデの広さをひとり手に入れて心ゆるみし秋の野遊び

山径の赤き実を指し妻の言う　自然の中で見るが一番

立冬の薄墨色の宮の庭古木の黄落夕日に煌めく

公園の花散り残る道端の人の気配をかもす自転車

石を割る桜の力仰ぎ見ん想い及ばぬ長き歳月

恥じらいの色を秘めたる紫陽花の言はで思ふぞ言ふにまされる

世の中に名の無き草は無いと云う路肩に蔓延(はびこ)るあまた草あり

棲みつきし古刹の池の錦鯉水藻に隠れて尾びれ隠さず

若者の群れる松島瑞巌寺雑誌翳(かざ)してインスタのはしり

令和三年春号投稿歌

歌題　回顧詠（東北忌十年）

春うらら蕎麦を求めて山あいへ古民家受継ぐ百年の味

新緑の木々の間に水平環声も失くして暫し見入らん

暑気払い主菜をしのぐ逸品の山並み街並み斜光に映えて

我が声が街に流れて面映ゆしラジオのトーク人をもつなぐ

雪の花ひらひらと舞う薄ら日に瞼閉じれば花はらはらと

首こりと言われて気付く己が齢彼岸の父をすでに越えたり

雪まじる春の嵐に佇める街並の一軒いま主なく

寂光に枯れ色の増す冬もみじ木枯らしに耐え揺れて競えり

「お名前は」問う受付に「お名前は」耳語で囁く付き添う娘

回顧詠（東北忌十年）六首

はじめてのブラックアウト増す恐怖さらに追い打つ車のラジオ

復帰した映像目にして言葉無し「Hell on earth」この世の地獄

ふたたびのブラックアウト真夜中に心にゆとりか被災地想う

便利さも慣れてしまえば当たり前大震災で見直す機会

海外のメディアが伝える高潔さ限度もあるよとひとり呟く

懐かしきつましき日々よみがえり計画停電これもまた良し

令和二年冬号投稿歌

歌題　虫時雨

挿し芽からふたとせ経ちて花を見て吾子を育てし昔憶えり

人知れず可憐に咲き居る姫さゆり木漏れ日受けて初夏を彩る

山路の片方に咲きし谷うつぎ背の深緑に色の際立つ

妻は薔薇食思の我はミニトマト庭を分け合い初夏を楽しむ

さり気なく薔薇の切り花食卓に育てし妻の胸裏醸せり

薔薇園の三重のアーチの真中に妻を配して一写入魂

家中にカサブランカの香り充つ鼻腔で味わう初夏の訪れ

草花が初夏を迎えて人を待つ英国風のガーデン爽やか

夏の夜の花火大会懐かしき時も流れて桟敷席有り

虫時雨賑わう暮れ方処暑の日の蜩・蟋蟀・鈴虫の宴

秋冷の霧が降りたる市街地を眼下に配す静黙（しじま）の里山

嗚呼朋よ祝いの帰りの機内にて逝きし無念を黄泉で語らん

「いつ捨てる」妻に問われし写真群部屋に飾って四季のミニギャラリー

地方紙に掲載されし我が活動「見たよ」の反応継続の糧

改革の文字を付けれど何事も施策は陳腐曇れるメッキ

十首選

籠りいし家をいづれば風光り既に早苗田
白雲映す　　船越　京子

七夕の願ひささやかにしてマスクせず友ら
とおしゃべり心ゆくまで　　三浦　弥生

拉致されし娘の消息知れずして絶えて待て
ども逝く父あはれ　　宮沢　勝男

はつ夏となるも重たき日々にして今朝はうれしきカッコウのこゑ　打越　勝子

庭花の咲くも気づかずこもりしも初夏を知らせる姫うつぎ咲く　山口　園枝

馬鈴薯の花が咲きをり何ごともなかったやうに青空の下　秋保　嘉子

この国はファッションマスクになり果てつ若きら香港のマスクは重き　浅井真紀子

ふり返りふり返りして散るさくら兄の写真の七つのボタン　石塚　満

昭和十七年改正の予科練の制服は桜と錨が描かれた七つボタンとか。写真

の背景は散る桜なのだろう。リフレイン
が効果的。社会詠の十首選とした。

外つ国よりコロナウイルス春一番どこ吹く
風と白鳥帰る　　伊藤　静子

交遊の無き生活を受け入れて夏至のひと日
を猫そばに居る　　伊藤　良子

令和二年秋号投稿歌

歌題　こころのバリア

痛む腰宥めつつ通う院内は我も溶け込む多老化社会

亡き母の形見の日記読み耽り誕生月の進まぬ断捨離

病得て己が余命を公表す知己の想いにわれ寄り添えず

震災忌風化の兆しの九年目車窓の向こうは春めくフクシマ

一本の桜に集う人々の想いそれぞれ城址の春日

花びらが流るるごとく散りにけり老いの桜樹春行くままに

つくづくと己が狭量を思いたり妻との日々の会話の端々

飛来して実を啄ばむ鳥ありきアロニアたわわ雨匂ふ朝

情報が表も裏も溢れおり読み手のちから問われる時代

バリアフリー携わりてはや二十年漸くブレイク「こころのバリア」

入道といわしの雲の鬩ぎあい起し初秋ゆきあいの空

夢求めビルの谷間を縫うようにゆりかもめに乗りビッグサイトへ

ハイキング帰路で戴く芒の穂わが家に移して秋もうひとつ

連れ合いと紅葉三昧秋ハイクカメラに収めてテレビで再現

三百坊静かに佇む石鳥居風雪耐え抜き歴史の語り部

令和二年夏号投稿歌

歌題　歌詠みて八年

公園のさくらと山茱萸咲き競う見上げる空は雪国の春

鳥海を遥かに臨む丘の上土門の写真の余韻と共に

鳳が濠の獲物を狙うごと咲き撓(たわ)みたる懸崖桜

娘より「いきなり団子」の宅配便熊本語る父の日となる

秋が立つ日を過ぎてなお暑き日々人の驕りへ天地の戒め

食材に寒を冠する由来知り期待嵩じてウェブに嵌れり

受験生乗せて列車の進み行く雪積む田の面朝日に煌めく

地の果ての砂漠に散った我が友の指輪の記憶浮かぶ八回忌

結社とは政治結社かと問いし我歌詠みて八年今は懐かし

枝に葉が五枚揃うと花芽付く摂理に気付く初春の居間

過疎の村ＳＮＳを味方にしディープジャパンで賑わいにけり

コンビニの時短の報に蘇える過猶不及と少欲知足

報復の負のスパイラル打ち破る力秘めたる国は何処ぞ

忘るまじ国民投票の後始末他国の苦悩は明日のわが身と

一万回国のトップのウソ発言ネット社会の病理の極み

令和二年春号投稿歌

歌題　食の宴

落ち葉から顔を覗かせ匂い立ち気品を醸すかたくりの花

フィットネス終えて浸かりし午後のスパ一雨上がり葦簀が光る

日の暮れの頭を垂るる向日葵にかたつむり這い野辺たそがれぬ

すすき梅雨晴れ間の山路あきつ群れ妻と戯れ帽子へ肩へ

道の端ビニールプール萎みおる片方に糸引く蟋蟀の声

サクサクと妻と味わう落ち松葉足に優しき秋の山路

妻が為すハンドクリーム我も塗る齢気づかす秋の訪れ

境内の陽だまりの中冬椿落ちて言いたげ「わたしはここよ」

メディアから空間線量表示消え八年経ちて薄らぐ意識

憲法の現実との差論俟たず「こうありたい」と掲げ目指すもの

連鎖する世界のテロの終焉は神にフリーな国が鍵握る

食の甲子園®で詠める四首

ホスト校笑顔で迎える前夜祭彩り深き蔵王に黄昏

甲子園生徒ら集う食の宴迎える秋の色深まりぬ

ふるさとを調理に籠める九十分繋がる想い深まる絆

甲子園審査結果の講評に伝わる想いスタッフ破顔

令和元年冬号　追悼歌・投稿歌・「夏炉冬扇」寄稿

追悼歌（阿部京子先生）

我もまた何れは果つる命なり先逝くわが師を遠地で憶う

歌題　入相の鐘

鬩ぎあう花壇と菜園リニューアル狭さの中の妻との会話

山里の初夏を先取る姫さゆり棚田を背に咲き一服の軸

朝明けて「ぽっ」とほころぶシャラの花若やぐ夏の色の真白き

荒梅雨の上がりし空へ一条の虹の架かりし里は夏の色

打ち水に暑さ鎮まる夕間暮れ漂う昭和の土の香微か

サンダルで御釜の傍ら歩み行く深碧色のペディキュアの足

蜩に誘われ集う且坐喫茶余韻の帰路の入相の鐘

県境のふところ深きブナの森われ抱かれてサンクチュアリ

照り紅葉かたわらの川に煌めいて共鏡のごと旅人癒す

親と子が点景となる杜の丘黄昏降りくる秋の野遊び

里の村稲かけに舞う雀らは人の都合で好まれ疎まれ

群衆とポリスで荒れる渋谷街今は懐かし創始のハロウィン

廃屋に歩みを止めし柱時計残りて語るや家族の営み

ハレの日に友への陰膳設える吾子の紡ぎし絆憶えり

フィットネス平日（ひらび）の日中（ひなか）はシルバーのサロンと化して世相の縮図

同号「夏炉冬扇」への寄稿

自分史へのアプローチ

その一：ＤＶＤ版「私的アンソロジー」の上梓(日本自分史センターへ寄贈)

山形の地に生まれ育まれ巣立った雛が歩むが如く、県外での三十年の社会生活の中で揉まれながら巷の一員として家族（連れ合いと子）を持ち、多くの方々との交流

を通じて頂戴した「糧」を活かす〈場・時間〉として五十代に入ってふるさと山形へのUターンを選びました。

その後の八年の月日の中で故郷の懐の深い多くの知己に支えられ活かされて一つの節目六十歳を迎えることになり、それを契機に辿った道のりを整理することで自身のその後の【林住期】における羅針盤としたいという想いから、運用中のHP内のデータを「核」としたDVD制作を思い立ちました。

このDVDは自身への〈ほうび〉と考えたところですが身内からは「分を弁え見せられる相手を考えて程々に・・・」と釘をさされたことも事実です。自身の存在証明といえば言い過ぎ、あるいは「あがすけ（ふるさとの言葉でいい格好をするの意）」でしょうか?自身をそうさせるのは根っこにある「好奇心」なのかもしれません。

このDVDは自身の仕事とは別のアクティビティの【写真】を「主役」としなが

ら幾つかの「（迷）脇役（著作・寄稿・映像・画像・音声など）」で支える形式で構成した「私的アンソロジー」となっております。

その二：冊子版「続・私的アンソロジー〈しあわせの構図〉」の発刊（県立、市立図書館へ寄贈、国立国会図書館に納本）

林住期の終盤にあたる七十歳を迎えた折にその後の【遊行期】への羅針盤となりこのところ衆目が集まる「自分史」の端緒になればとの想いから冊子版「続・私的アンソロジー〈しあわせの構図〉」の制作を思い立ちました。

冊子は発刊に寄せて・プロローグ・写真・短歌・写真短歌・コラム「飛耳長目」・年譜（地域活動のサマリーを含む）・エピローグなどで構成しております。

プロローグには前述のＤＶＤの中からマイプロジェクト・地域力共創への歩み・写真などを再編して組み入れ、新たにＵターン後にライフワークとなった短歌・写真短歌・コラム「飛耳長目」を掲載しております。

なお、「発刊に寄せて」には社会に出てからこれまで約半世紀の様々なシーンでお付き合いとご指導を賜った方々七名（黄雞社運営委員長阿部先生からも戴いております）の方々から内容の未熟さを補って余りある言葉を頂戴しております。

黄雞社本社、各支部に一冊謹呈しておりますＢ５版の装丁、百五十六頁の本冊子は制作部数の制約を補うためパソコン上で本を捲るように見ることができる「デジタルブック版」も制作しＷｅｂサイト上に公開しております。

http://sk-solutions.org/shiawasenokouzu

また、今秋にリニューアル公開する弊ＨＰのアーカイブスの中でこのデジタルブックを公開しております。

令和元年秋号投稿歌

歌題　一日一生

強霜を迎えし庭の姫沙羅の紅葉はらはら裸木寂し

布施柿の慣わし廃れ僻村の群れ柿花火に夕光は射す

里山の雪の冷気を孕む風穭田(ひつじだ)渡りわが頬撫でゆく

年の瀬の買物ひとつの諍いを諌める如き除夜の鐘の音

年あけて芸子の誕生耳に入る祭事の席のこころ弾めり

お三度の休みを妻にプレゼント物より嬉しと笑みの零るる

凍返る浅春の朝雪を掻く「この冬最後」と妻の励まし

立志式わが中学期は無かりけりプレゼン授業の子らは楽しげ

「春よ来い」唄いて路地行く母娘(おやこ)おり淡雪降り積み足跡隠す

寒戻り地蔵の肩に雪が積む被災地の辛苦荷うが如し

終活の記録のノート仕上がりて妻と娘と語る小正月

死にきるが一日一生生ききると悟れば人は愚直に生きる

風光る庭のあおだも芽吹き初みわが家の貌に生ひ立ちにけり

わが友の最後の授業「よのなか科」教職人生締め括りけり
短冊に子らの未来を詠みあげて教職終えし我が友なりき

令和元年夏号投稿歌

歌題 阿久悠のニュース短歌へのオマージュ

当今のメディアを賑わす「新公共」見かけ倒しの言葉が躍る
民と官めざす協働急かされて埋まらぬ乖離心の澱に
「自然には敵わないよ」と毛沢東 主義が違えど旨意は時を越え
汚染記事語れず黙す牛憐れ語れて語らぬメディアと行政
被災地を踊らす風評負の連鎖予定調和の追い打ち続く
わが友に再び強いる車椅子影響深き震災のかげ
水道管付け替え工事始まりぬ想い至れり被災地の朝
隣国の事故処理ニュース他人事ひとごとに天に向って吐く唾のごと

核と云う管理不能のエネルギー手を染めたるは人の世の罪
限りある地球の資源知りてなお飽くなき成長求む愚思えり
為政者が懲りずに語る「成長」は生業ゆえの降ろせぬ御旗
「新しい判断」あれば公約は無きものとして通る今の世
不祥事がメディアを賑わす今だから想いを馳せん「名こそ惜しけれ」
非正規が四割超えてはや三年「総活躍」は疾うにレームダック
食や旅心の洗濯遠のけりインスタグラムに弄ばれて

平成三十一年春号投稿歌

歌題　愛妻の日（一月三十一日の日）

眺望の謂れを読めば眼裏に浮ぶ往時の合戦絵巻
天災が人災隠すこともある語り伝えてつなぐは次世代
立夏過ぎこぞの日差しを思い出し植えし流行のグリーンカーテン

御堂へのアジサイの路雨あがり揺れる一枝ひとげを残す

初めてのゴーヤの花の香慎ましき暑さ忘れて妻と語らう

夕間暮れ峰の山肌色萎ゆる斜光一条秋景戻る

忘れ雪「これがそうね」と語らいて重い腰上げ身支度する朝

春隣手袋の穴開くほどに汗を流せり堅雪くずし

夕間暮れ入り日射し入る芒原山辺と野辺を分けて耀(かがよ)へり

子供らの歓声おちこち春彼岸薄氷を割り花立清めり

三十代われ滞在せし中東は遥か昔の安全地帯

花求む誕生月は寒の雨愛妻の日を知る一月三十一(あいさい)日の日

荷を置いた園児ら何処と索れば歓声微かに小春日の丘

朱く佇つ鳥居の見守る最上川片方の滝は落ちて凍てつく

岩肌に数多の小銭喰い込めり託す願いに木洩れ陽ゆれて

平成三十年冬号投稿歌

歌題　独白（モノローグ）

雨上がり茶席の帰路へ斜光射す見遣る家並の屋根輝けり

秋浅し日の斑つらなる山の路踏む松落葉足に優しき

毎朝の雪かきに見る家の貌思い行きかうたかがとされど

しあわせの尺度を語る我もまた比較社会の小さき一人

炎天の舗道を歩むビジネスマン陽炎う姿は過ぐる日の我

朝まだき瀬音幽かな山の宿こころ放てり露天の湯ぶね

珍しき朝のかみなり夏匂う郭公鳴き止みつかの間の黙（もだ）

慎ましき子供の神輿街を練る掛け声近づき遠のく夏日

風揺らすゴーヤの日除け役目終え蔓の葉色づく新涼の夕

あさぼらけ新聞受けの笠に露暑さ残して起し初秋

朝まだき目覚めし朝は寒の雨ふとんの温さにまた夢さがし

水の春早苗の空に雲流る頬を撫でゆく風の声聞く

わが家に遅き春あり黄の匂う庭の水仙初花ひとつ

家住期に慣れ親しんだ横浜は三日過ごせど馴染めぬ街に

成長と翳す御旗も色褪せぬ身の丈こそとわれひとりごつ

平成三十年秋号投稿歌

歌題　「Hell　on　earth」

風に乗り庭に届きしもみじ葉のおしろい粧う初霜の朝

朝ぼらけ弥生最後のなごり雪外山も白く斑に染まる

窓越しの光をまとう木蓮にそっと声かけ春をうかがう

バス車中翁嫗で賑わいて訛り飛び交うクラス会の旅

午の春土手に群れ咲く山吹の花をそよがす風吹き降りき

記念日を夫婦で祝うレストラン話す相手はスマホの向こう

主菓子の届く父の日薄茶たて小意気に過してメールで返礼

幾千の彼岸の兄の蝶たちが特別展に舞い降りにけり

老いの知恵友を見舞いて湧き出でし妻の浴後にわれ床につく

城跡に春を探せば花筏花のさかりはよべの夢の中

うつし世の虚栄の極みかフォロワーが売り買いされるインスタグラム

五輪終え熱気過ぎ去り我が日々に三十一文字の時間戻りき

七年目記事の弱まる震災の我の記憶は「Hell on earth」

阿久悠のニュース短歌を試みて没後十年オマージュとせん

久々にぎっくり腰で床につき無為の時間を作歌にあてり

平成三十年黄雞七十巻記念歌集「饗宴」掲載歌

平成三十年歌誌夏号掲載の十五首及び秋号掲載の十五首を

再掲載して歌題　Anthology 2018とした（掲載省略）

平成三十年秋号「七十巻記念特集号」投稿歌

「七十巻を祝う歌一首」

先達の歩みを記す「七十巻」慶賀の年に仲間となりぬ

「我が思い出の一首」

風邪に臥し久々に見る夢の中母の十八番の懐かしき粥

（コメント）

二年前、覚えたての短歌を初めて〝やましん歌壇〟に投稿した際、一介の投稿者にも拘わらず選者のお一人阿部京子先生からわざわざ架電を頂戴し、二句目の言葉の扱いの指摘、添削をいただいて掲載されたビギナーズラックとも言える一首です。

そのご縁で黄雞に入会させていただき、昨年秋に発刊した弊冊子「続　私的

アンソロジー〝しあわせの構図〟」にもお言葉をいただきました。

平成三十年夏号掲載歌

歌題　アンソロジー

壁いちめん覆い尽くせり春の薔薇主の想いを語り咲きおり

昼深き手入れの庭に夏匂ひ手掛けし主の思い漂う

昼下がり夢路に届く郭公の鳴き声幽か小暑のうたた寝

散歩道出会いし父娘の朝練の励む姿に朝日射しをり

歳かさね暑さ身にしむ梅雨盛り髪すく妻にカット勧めん

山麓のコスモス畑に踏み入りて遊ぶ夫婦にたそがれは来ぬ

ゴミを出し戻りの路の足先に伸びたる影は秋へのきざはし

「おはよう」と吐く息白き隊列の子らに重なる我が学童期

夕立の校門前に車列なす下校の光景様変わりけり

薄ら日はこの地と等しく微笑むかかの地はいまだ除染に喘ぐ

夏ちかし山並み白雲菜の畑薫風の中墓並びをり

秋浅き日の斑つらなる山の路踏む松落葉足に優しき

黄昏れる岸辺の雪にかまくらの灯影連なりミニ天の川

ほろ苦き期待をこめて札狙う中学最後のかるた大会

アンソロジー我が歩み記す一冊の無事の入稿誰に伝へむ

山形県 歌人クラブ 三

年刊歌集掲載歌

二〇二二年版　山形県歌人クラブ年刊歌集掲載歌集　第四十集

題名　アンソロジー　２０２２

寄贈せし己が冊子の納まりし書架の一隅舞台のごとし

雪纏(まと)い墨絵の如き裸木に重ねて憶(おも)えり新緑紅葉

健診日謝りてなおわが腕に三度の針射す新人看護師

名を刻す指輪で特定されし友散りし砂漠禍祈る十回忌

廃屋の狭庭の草花風に揺れ主の去りしを知るや知らずや

うぐいすの初鳴き届きおずおずと目覚むる朝はコロナ禍の春

咲き揃う我が家の貌の夏椿しのつく雨に濡れそぼち立つ

熊避けの鈴の音近づき遠ざかるいつもの山路いつもの挨拶

ゆく夏を惜しむがごとく鳴き頻る蝉と迎うる敗戦忌の昼

一条の縄で括られしんと立つ夕光(ゆうかげ)の射す墓じまいの石

二〇二一年版　山形県歌人クラブ年刊歌集掲載歌集　第三十九集

題名　アンソロジー　２０２１

黄昏るる湖面に溶け込む秋の山墨絵にも似てこころ凪ぐ時

凍てし道粉雪の下に隠れおり歩みは摺り足ゴミを出す朝

なごり雪「これがそうか」と呟けり妻も頷く春の往還

蕗味噌は春の使いと立つ厨レシピ片手に男の一品

風そよぎ甘き香流るる山路にニセアカシアの大樹揺れおり

戦時下の「欲しがりません」浮かびくる新生活のメディアの喧伝

郭公に野鳩加わりデュオとなる遠雷幽か半夏生の朝

「おとうさん」幼い文字の絵日記が不意に現るキャビネットの奥

風情より取り外しの手間難渋に夏簾揺れはや秋の風

サックスの音に誘われ公園を辿れば若者壁に向きおり

二〇二〇年版　山形県歌人クラブ年刊歌集掲載歌集　第三十八集

題名　アンソロジー　２０１９

核を持つ国が他国へ求めたる放棄の論理に不条理覚ゆ

めぐり来る建国記念日新聞に是非論載りしも遥かとなりぬ

山里の田舎芝居の幕の下り夜の帳（とばり）に桜舞い散る

石蹴りの筋跡避けて草むしる桜の蕾ほころぶ公園

山あいのオープンガーデン風そよぐ鮮（あざ）やぐ初夏を妻と頒（わか）てり

「寄り添う」の言葉の重さ比べ読む沖縄語る今朝の新聞

十五歳父の遺骨を抱き帰る双葉町の墓に夏の日落ちき

風鈴に虫の音加わりコンチェルト主役の代わりはや秋の風

寺の秋茶会の前の挨拶は仏縁地縁の訛り溢れて

ハイカーの標（しるべ）ならんと咲き並び山路を誘うりんどうの群れ

「Ⅱ 歌集」へのあとがき

Ⅳコラム・飛耳長目／著作・投稿・寄稿篇に掲載している講座資料「クオリティオブライフの羅針盤（自分史の視点から）」で「自分史は自分の次のステージへの羅針盤」と紹介していますが、今回のⅡ歌集を編むにあたり知友から次のような意見を頂戴しました。

歌集や句集などはその発刊時点での選りすぐりで編むのが一般的であなたの歌集はアンソロジー仕立てになっていて次のステージへの羅針盤という特徴があると。

なるほどこれまで制作したＤＶＤ版私的アンソロジーも冊子版続 私的アンソロジー〝しあわせの構図〟も同じ位置づけになっていると得心したところです。

１９４７年山形市生まれ。ソリューション・コラボレーター。山形大学工学部卒業後日揮（株）入社。企画・プランニング・基本設計・建設・運転・プロジェクトマネジメント・営業などを通して海外および国内産業界の各種ソリューション（課題解決）・プラント建設・運転などを担当。１９９９年日揮（株）退職し山形にＵターン。２００１年㈲ＳＫソリューションズ設立（代表取締役）。経営コンサルティング業の傍らＣＢ推進コンソーシアム（プロジェクトマネージャー）、山形市福祉のまちづくり活動委員会（事務局長）、おいしい山形の食と文化を考える会（事務局長代理）、（ＬＬＰ）山形ふるさと企画舎（代表）、地域力共創推進コンソーシアム（代表）、ＮＰＯパワーアップコンソーシアム（代表）、東北まちづくりオフサイトミーティング（運営委員）などを通じて地域力共創に関わる。2016年㈲ＳＫソリューションズを解散しＳＫソリューションズ代表として活動中。

１９９５年　三人展（写真）@横須賀市
１９９６年　個展〝しあわせの構図〟（写真）@横浜ランドマークプラザ
２００９年　DVD 私的アンソロジー（自分史）を上梓
２０１５年　遊縁の衆として歌集【遊縁】を上梓
２０１８年　冊子&デジタルブック「続 私的アンソロジー〝しあわせの構図〟」を上梓

続・続 私的アンソロジー〝しあわせの構図〟「Ⅱ 歌集」
二〇二三年三月十三日　初版一刷発行
著者　黒沼　貞志
発行者　ＳＫソリューションズ
〒990-0831　山形市西田一-十二-十
Fax　023-646-2448　Tel　090-2522-4548
E-Mail　sks@sk-solutions.org　URL　https://sk-solutions.org/
印刷・製本　冊子印刷ドットコム（株式会社春日）
領価（分冊Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳケース入り）　1，000円
ⓒ Sadashi KURONUMA＼SK Solutions 2023